

8月相場は夏枯れの「凡打」?

text by Akio Tanaka

文 田中 晶雄

今年も8月5日から全国高等学校野球選手権大会が始まった。野球少年だった筆者にとっては楽しみに季節がきた。記念すべき100回目の節目を迎える今大会のキャッチフレーズは「本気の夏、100回目」。全国3781校から勝ち上がった56代表校が、甲子園球場で熱戦を繰り広げられ、優勝校には深紅の優勝旗が贈られる。果たして8月相場は夏枯れの「凡打」となるか? 夏の株高という「ヒット」につながるか?

筆者はここまで、トランプ政権の動きとマーケットの関連に注視してきたが、幸いなことに、市場は先んじて、良い意味でトランプ政権を見捨て始めたようだ。このところ、前述のような米連銀への干渉ともとれる発言を大統領が行なっても、2000億ドルの対中輸入分に対する関税引き上げの具体的な品目を米政権が公表しても、さらには対中輸入のすべてを関税引き上げの対象にすると可能性が示唆されても、米国をはじめとする世界の株価や米ドル相場の波乱は限定的だ。実際のところ、米政権が何をしようと、米連銀は景気や物価、金融市場などを淡々と見つめ、必要であれば利上げを行なう、という路線は全く変えなはずだ。米企業も、関税がどうなるかと、これまで同様、利益を上げて生き残っていかなければなら

らない。したがって市場は、徐々に米国の政策に対する関心を薄れさせ、「そもそも内外の景気や企業収益はどうなのだ」という点に目を徐々に向けている。そうした点で考えれば、まだ米国のマクロ経済は強く、企業収益も堅調で、加速こそしていないものの堅調に伸びている、と言える。さらに、2月頃に顕著になっていた米国株価の買われ過ぎも、その後の株価調整を経て、予想PER(株価収益率)などでみて割高感は解消されている。

一方、日本についても、8月から徐々に4〜6月期の決算発表が本格化する。足元では経常利益ベースでの増益基調が見込まれている。3月本決算発表時で収益実績がかなり好調でも、自社の通期の収益見通しを据え置くことが多い。それでも、投資家は日本企業の収益の堅調さを、前向きに評価する方向へ向かいそうだ。

日本株のバリュエーションも割安だ。12カ月先までの予想利益を用いると、東証1部の予想PERは、第2次安倍政権発足後は概ね13〜16倍で推移してきたが、7月第1週(2日〜6日)の平均値は12.9倍と、13倍を割れていた。その後の株価の戻りで予想PERはやや上昇したものの、7月第3

週(17〜20日)では13.3倍と、まだ割安さが強く残ると言え、実態面での日本株の投資環境の良さに着目した、中期上昇相場の流れの中にあると考えられる。

その流れの中で、8月相場のリスクとしては、米国とイランの衝突リスクに警戒だ。2015年の8月は「チャイナショック」、2016年の8月は米軍によるシリアへのミサイル攻撃で相場が荒れた。古くは1990年のイラクによるクウェート侵攻も8月である。「8月相場は波乱」のイメージがあり、また「8月は夏枯れ相場」と言われる。野球に例えるならば、投資家の皆様は今脇を締めてコンバクトにバットを振る局面、バットを大振りするような吹き値買いはぜひ避けて頂きたい。



Profile

平成3年2月26日生まれ
慶應義塾大学経済学部卒業後、外資系証券投資銀行部を経て、株式会社HALUXAS Capital等を創業。日本株のトレーディングや資金調達、M&Aのコンサルティングを手がける。趣味は野球と低位株投資。